125 トッパンホールプレス
［Sep. 2023］隔月発行

TOPPAN HALL PRESS

トッパンホール アンサンブル／周防亮介、猶井悠樹、笹沼 樹、柳瀬省太（2023.4.25）© 大窪道治

〈ハーゲン プロジェクト 2023〉

ハーゲン・クァルテット

熟成と清新の融合、唯一無二の至芸との再会　柴田克彦

［特別寄稿］

ティル・フェルナー（ピアノ）

ウィーンから世界へ、時代もスタイルも違う傑作を一晩で

ラファエル・アギーレ（ギター）

あふれる感性とシャープな知性、天才アギーレを聴こう！　片桐卓也

［ Schedule 2023.10～2024.3 ］

［ Information ］

トッパンホール23周年 バースデーコンサート ―― 新ウィーン楽派への軌跡

ランチタイムコンサート Vol.124 北村明日人（ピアノ）＆落合真子（ヴァイオリン）

第92回 日本音楽コンクール予選

熟成と清新の融合――唯一無二の至芸との再会

“熟成された新しさ”……ハーゲン・クァルテットのステージには、通常のベテラン弦楽四重奏団にはない、そうした魅力が横溢している。彼らは40年以上に亘って第一線で活動してきた世界屈指の四重奏団。パッケージ化された芸のルーティンだけでもコンサートは成り立つであろうが、その座に甘んじることなく、変貌と深化を希求し続けている。それが彼らの真の凄さだ。そんなハーゲン・クァルテットの日本のホームグラウンドがトッパンホールである。そして彼らは今秋、ここに帰ってくる。

ハーゲン・クァルテットは、ザルツブルクの音楽的環境で育ったルーカス、アンゲリカ、ヴェロニカ、クレメンスの兄弟姉妹によって結成され、1981年ロッケンハウス音楽祭で審査員賞と聴衆賞を受賞。82年のポーツマス弦楽四重奏、83年のエヴィアン国際等、数々の国際コンクールで優勝を重ねた。そして1985年に名門ドイツ・グラモフォンと専属契約を結び、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン等のCDを相次いでリリース。メンバーは、第2ヴァイオリンのみアネッテ・ビク、さらにライナー・シュミットに交替したが、基本的な音楽スタイルは維持したまま進化を続け、世界のトップ四重奏団として長きに亘って活躍している。

日本では、当初主にグラモフォンへ録音した数々の名盤によって認知されたが、21世紀に入るとトッパンホールがメインの発信元となった。当ホールでは、2003年の初登場以来、05年に「ベートーヴェン後期弦楽四重奏曲全曲」、06年、08年を経て、10年に「with クリスティアン・ツィメルマン」および「シューベルト、そしてウィーン」、13年に「ベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲」、15年に「モーツァルト」、17年に「シューベルト＆ショスタコーヴィチ」、19年に「ハイドン＆バルトーク」の各ツィクルスと、意義ある〈ハーゲン プロジェクト〉を継続して行い、ホールのバースデーや記念シーズンの幕開けも再三飾ってきた。彼らはいわば“弦のトッパン”の柱であり、当ホールは彼ら自身も認める“日本のホーム”なのだ。弦楽四重奏の性格上、ホームの存在が重要であるのは言うまでもない。

さらに弦楽四重奏は緻密な積み重ねを要する形態だ。結成から40余年、シュミットに替わってからでさえ36年が経つハーゲン・クァルテットの公演は、その類い稀な熟成を味わうだけでも、足を運ぶ価値がある。だが彼らは、オーストリアの音楽基盤と兄弟姉妹による出自に根ざしたインティメートな温かさ、しなやかで息の合ったアンサンブルを維持しながら、ルーティンを排して楽曲と向き合う厳しい姿勢と最新の視点に拠って、予測を超えたアプローチや自在性や余情を加えてきた。つまり毎回感動と共に“驚き”がある。以前インタビューしたライナー・シュミットもこう話していた。『私たちはいつも、作品をインテンシヴ（徹底的、集中的）に理解するよう努めています。世の中の作品解釈の変化の良い面を取り入れつつ、もう一度楽譜から何かを読み取る。今も緊張感をもって新しいことを理解するのが一番の目標だと思っています』。

例えば今回のプログラムにあるモーツァルトの弦楽四重奏曲第14番。この曲は、1999年グラモフォン、2014年myrios classicsに録音し、15年当ホールの「モーツァルト・ツィクルス」でも披露している。1999年の録音は、伸びやかで生き生きとした、とても魅力的な演奏だ。だが2014年の録音は、フレージングの振幅や表情の変化が大きな、より深みのある表現がなされている。直線から曲線の音楽に変わったとも言えようか。27分58秒→30分22秒と、約2分半伸びた演奏時間にもそれが表れている。また15年の「モーツァルト・ツィクルス」では、様式美とロマンティシズムを併せもつ濃密な名演を展開。「ハイドン・セット」の重要性を明示している。しかしながら、前例から既に8～9年が経過した。変貌する彼らが、今回いかなる音楽を聴かせるか？ そこに大きな興味とライヴに足を運ぶ意義がある。

2021年の中止を経ての今回のプロジェクトだが、彼らは同じ演目を移行するのではなく、一部を残しながら、新たなプログラムを構成している。それは、3夜それぞれに大看板のモーツァルトとベートーヴェンの名作を配して、『今トッパンホールの聴衆と共有したい』と考えるラヴェル、ドビュッシー、ウェーベルンの作品を1曲ずつ加えた、彩り豊かな内容だ。モーツァルトは「ハイドン・セット」以降の円熟作である第14、15、21番、ベートーヴェンは中期の《セリオーソ》《ラズモフスキー第2番》と後期の第13番＆《大フーガ》が並ぶので、実に密度が濃い。

モーツァルトは前記の通りで、ベートーヴェンも毎回瑞々しい表現をみせてきただけに要注目。なかでも第13番は、彼らが特に力を注いできた作品であり、シュミットも『6つもの楽章がどんどん離れていくかのようにコントラストが強まる

あふれる感性とシャープな知性

世界的なコンクールで優勝を重ねたことからクラシカル・ギター界で話題となっていたラファエル・アギーレは、何度か来日公演を行っていて、その豊かな音色とソノリティだけでなく、シャープな感性と知性による巧みなプログラミングで、一部に熱狂的なファンを持っている。そのアギーレがトッパンホールというギターのサウンドにぴったりのホールで公演を行うことは、ギター・ファンにとっても期待が高まるが、普段、あまりクラシカル・ギターに接していないという方にも、アギーレという演奏家を知る絶好の機会となるだろう。

2007年のコンクール優勝後にリリースされたデビュー・アルバムでも、出身地であるスペインの作品に限らず、魅力的な現代曲をプログラミングしていたアギーレ。日本公演でも、その選曲のバラエティと、それを選んだ理由にも納得させられることが多い。前回の来日公演（2020年／浜離宮朝日ホール）では、ヒメネスの《ルイス・アロンソの結婚》からの〈間奏曲〉をプログラムに入れていたが、それは伝説的ギタリストである山下和仁による編曲版であった。アギーレはこの曲の録音も行っており、山下へのリスペクトを強く感じさせるその演奏に、ちょっとジーンとしてしまった。

前回の来日公演ではアギーレ自身のルーツであるスペインという国、そこで生まれ育った作曲家、そしてスペインのギター音楽の多様な世界を、様々なスタイルの作品を

柴田克彦

構成。つまり次の楽章で予期せぬことが必ず起きる作品です』と話していたのでとりわけ楽しみだし、中期の名作の演奏は10年ぶりとなるだけに、今の表現がすこぶる興味深い。ラヴェル等は（約30年前の録音はあるが）実質的な未知のレパートリー。彼らが2010年代に奏でた緊密で研ぎ澄まされたショスタコーヴィチ作品と同様の清新なインパクトが期待される。

4年ぶりにホームで実現するハーゲン・クァルテットの3夜。長き練達ゆえの熟成と、常に絶やさぬ先取の気質が融合した、唯一無二の至芸を、聴き逃してはならない。

（しばた・かつひこ／音楽評論家）

〈ハーゲン プロジェクト 2023〉
ハーゲン・クァルテット

2023年10月31日（火）19：00 残席わずか
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第11番 ヘ短調 Op.95《セリオーソ》
モーツァルト：弦楽四重奏曲第14番 ト長調 K387
ラヴェル：弦楽四重奏曲 ヘ長調

2023年11月1日（水）19：00 完売
モーツァルト：弦楽四重奏曲第15番 ニ短調 K421（417b）
ドビュッシー：弦楽四重奏曲 ト短調 Op.10
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第8番 ホ短調 Op.59-2《ラズモフスキー第2番》

2023年11月2日（木）19：00 残席わずか
モーツァルト：弦楽四重奏曲第21番 ニ長調 K575《プロシア王第1番》
ウェーベルン：弦楽四重奏のための緩徐楽章
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第13番 変ロ長調 Op.130
＋大フーガ 変ロ長調 Op.133

（各日）7,500円／U-25 3,500円　全席指定
特別協賛：鹿島建設株式会社
協賛：東京書籍株式会社／東洋インキSCホールディングス株式会社／図書印刷株式会社／TOPPANエッジ株式会社

特別寄稿

ウィーンから世界へ
── 時代もスタイルも違う傑作を一晩で

ティル・フェルナー
（訳：フェルナー亜沙子）

2007年、トッパンホールでのリサイタルが終演した時、プログラミング・ディレクターの西巻さんに「次のプランは？」と、聞かれたのを覚えています。

2008～2010年にかけて、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全32曲を7回に分けて演奏する計画があると伝えると、当時日本では名前がまだそれほど知られていない私のこの少し大きすぎる話に興味を持ち、音楽事務所KAJIMOTOと共同で全公演を開催することを決めてくださいました。この壮大なプロジェクトを実現するのは、簡単な決断ではなかったはずです。その覚悟をしてくださったことを、今でも、そしてこれからも感謝し忘れることはないでしょう。

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全曲演奏会／2008～2010年 全7公演

ベートーヴェン・ソナタのツィクルスには、特別な芸術的喜びがありました。32曲全てが新しく、異なり、最高級の質を持っているからです。東京だけでなく、ヨーロッパ（ウィーン、ロンドン、パリ）や北米（ニューヨーク、ワシントンDC）でも行ったため、この両年でベートーヴェン・ソナタのリサイタルだけでも100公演以上という、ロジスティックな挑戦にもなりました。

他にもトッパンホールには、私の長年の素晴らしいパートナーであるテノールのマーク・パドモアとのシューベルト三大歌曲集、ベリオやツェンダーの作品を織り交ぜたシューマン プロジェクトを実現していただきました。

シューベルト三大歌曲／2011年 全3公演

＊　＊　＊

今回のプログラムは、全てウィーンで書かれた曲。けれど時代もスタイルも違う4つの傑作を集めました。

私にとって最も美しく、最も感銘深い作品の一つであるシューベルト《即興曲 D935》は、ローベルト・シューマンによるある論文が発表されて以来、事あるごと、執拗なまでに4楽章からなるソナタだと論されてきましたが、私はそれが的確な意見だとは思いません。むしろ独立した4つの作品であると言えるでしょう。ですから、この即興曲の演奏を他の音楽で中断するのは、不自然なことではなく、可能だと考えています。私が選んだのは、シェーンベルク《6つの小さなピアノ曲》。短いミニアチュール、しかし極度な緊張感、そして強い表現力を持ったこの「自由無調性」、調性（長調／短調）ではもうない、それであってまだ十二音技法は使用されずに書かれた音楽です。

シューマン プロジェクト／2016年 全2公演

後半はウィーナー・クラシックで有名な2つの作品。暗く重々しいハ短調のモーツァルト《幻想曲》で始まり、輝かしい光を放つハ長調のベートーヴェン《ワルトシュタイン》で終わる旅になります。《ワルトシュタイン》はピアノ曲に新しい響きの可能性を拓き、そしてプライベート・ルームやサロンで演奏する曲ではもうなくなり、より大きな空間、コンサートホールでの演奏を求めて書かれました。今回のプログラムをこのソナタで終わらせたい理由もそこにあります。

大好きなコンサートホールの一つ、トッパンホールでこのリサイタルができることを心から楽しみにしています！

ティル・フェルナー（ピアノ）
2023年11月24日（金）19：00
シューベルト：4つの即興曲 D935より 第1番 ヘ短調／第2番 変イ長調
シェーンベルク：6つの小さなピアノ曲 Op.19
シューベルト：4つの即興曲 D935より 第3番 変ロ長調／第4番 ヘ短調
モーツァルト：幻想曲 ハ短調 K475
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第21番 ハ長調 Op.53《ワルトシュタイン》
6,000円／U-25 3,000円　全席指定
特別協賛：株式会社 安藤・間

で新たな世界を広げゆく、天才アギーレを聴こう！

片桐卓也

取り上げた。アギーレはそれを「スペインのfiesta（パーティー）」と表現していたが、まさにスペイン音楽フェスのような豪華なラインナップだった。今回の公演プログラムは、J.S.バッハの《シャコンヌ》を含むクラシック音楽の名作のギター編曲版を含み、近代のギター音楽の発展を眺めつつ、それらに触発された現代のギタリストたちの多彩な世界が広がっている。アギーレがこだわり続けるフラメンコをベースとした作品も取り入れられており、アギーレの本当に多彩で多才な音楽性を楽しめるプログラムとなっている。

前回の来日の時にアギーレは「現在ではクラシカルな音楽とフラメンコは分けて考えられるようになったけれど、19世紀においてはその区別は無く、同じカテゴリーの作品と考えられていました。私は、いまそのふたつのジャンルを再び同じステージの上で表現すべき時代に入ったと感じています」と語っていた。今年の公演でも演奏されるパコ・デ・ルシアの作品は、まさにフラメンコ音楽をベースとしながらも、現代的な和声やリズムの影響を受け、独自の進化を遂げた現代曲でもあって、テクニック的にも難しい。それだけではなく、フラメンコの音楽センスとその音楽への深い理解が無ければ演奏できない作品である。アギーレがスペイン人として、そうした作品を演奏する意義を常に意識しているのは当然のことだ。

さらにネタばれになってしまうかもしれないが、バッハとバリオスの《大聖堂》、バッハとショパン、バリオスとボンファというような作品と作曲家の秘かなつながりが選曲の中に隠されていて、実際の演奏のなかで、それらの作品同士がどんな風に響き合うのかという点も非常に楽しみである。

演奏においての集中力とパッションとしての表現意欲、そして細やかに感じられる息づかい。これらのすべてがギターを弾く上で大事なものだと思うのだが、その点でアギーレは傑出している。ギター音楽は詳しくないという方も、彼の演奏には惹き付けられるはずだ。クラシカル・ギターはだいたいが6本弦の楽器であるけれど、アギーレの演奏ではその1本1本が常に呼吸し、微かな震えから激しい波のような揺らぎまで、音楽を伝えて来る。右手と左手の絶妙なバランスがさらに音楽の陰影を深める。個人的な思い出にからめて言えば、真夏のスペイン南部を旅行した時に感じた光と陰、その眩さと深い闇のコントラストを、アギーレの演奏の中に感じた。それに再び接することができるのが待ち遠しい。

（かたぎり・たくや／音楽ライター）

ラファエル・アギーレ（ギター）
2023年10月4日（水）19：00
ジュリアーニ：大序曲 Op.61
J.S.バッハ：シャコンヌ
（無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 ニ短調 BWV1004より）
メンデルスゾーン：《無言歌集》第1巻より〈ヴェネツィアの舟歌〉Op.19-6
バリオス：大聖堂
ショパン：《24の前奏曲》第15番 変ニ長調 Op.28-15〈雨だれ〉
パコ・デ・ルシア：月に映えて（グラナイーナ）
パコ・デ・ルシア：ルシアのグアヒーラ
ブスタマンテ：ミゾネーラ
ボンファ：リオの散歩道
グティエレス：アルマ・ジャネーラ
ララ：グラナダ
5,000円／U-25 2,500円　全席指定
特別協賛：株式会社 竹中工務店

SCHEDULE 2023.10～2024.3 主催公演

トッパンホールチケットセンター (10:00～18:00 土日祝休) 03-5840-2222

日時			公演
10／	1	(日) 16:00	**トッパンホール23周年 バースデーコンサート** 周防亮介（ヴァイオリン）／笹沼 樹（チェロ）／兼重稔宏（ピアノ） 小川恭子（ヴァイオリン）／中 恵菜、田原綾子（ヴィオラ）／佐山裕樹（チェロ） クァルテット・インテグラ 特別協賛：株式会社 安藤・間
	4	(水) 19:00	**ラファエル・アギーレ**（ギター） 特別協賛：株式会社 竹中工務店
	21	(土) 17:00	**アレクサンドル・タロー**（ピアノ） 特別協賛：清水建設株式会社
	31	(火) 19:00	〈ハーゲン プロジェクト 2023〉 **ハーゲン・クァルテット**（全3夜） 特別協賛：鹿島建設株式会社
11／	1	(水) 19:00	
	2	(木) 19:00	
	24	(金) 19:00	**ティル・フェルナー**（ピアノ） 特別協賛：株式会社 安藤・間
12／	7	(木) 19:00	**フォーレ四重奏団** 特別協賛：株式会社 竹中工務店
	12	(火) 19:00	**ズラトミール・ファン**（チェロ）＆**アレクサンドル・カントロフ**（ピアノ） 特別協賛：清水建設株式会社
1／	14	(日) 15:00	**鈴木優人**（チェンバロ） **J.S.Bachを弾く 3 ― 平均律第2巻** 特別協賛：東急建設株式会社

日時			公演
1／	21	(日) 15:00	**トッパンホール ニューイヤーコンサート 2024** 日下紗矢子（ヴァイオリン）／ペーター・ブルンズ（チェロ）／フローリアン・ウーリヒ（ピアノ） 特別協賛：鹿島建設株式会社
	23	(火) 19:00	**イアン・ボストリッジ**（テノール）、**アレッシオ・アレグリーニ**（ホルン）、**ジュリアス・ドレイク**（ピアノ） 特別協賛：株式会社 安藤・間
2／	13	(火) 19:00	**イリア・グリンゴルツ**（ヴァイオリン）― **無伴奏**
	16	(金) 19:00	**Trio Rizzle meets イリア・グリンゴルツ**（ヴァイオリン）
3／	10	(日) 17:00	**岡本侑也**（チェロ）― **無伴奏 Ⅱ** 特別協賛：株式会社 安藤・間
	13	(水) 19:00	**アレクサンドル・メルニコフ**（ピアノ） 特別協賛：鹿島建設株式会社
〈ランチタイムコンサート〉 トッパンホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート			［全席指定］
10／	11	(水) 12:15	Vol.124 **北村明日人**（ピアノ）＆**落合真子**（ヴァイオリン） **ドイツ・ロマン派の響き ～ベートーヴェンからの解放～**
12／	15	(金) 12:15	Vol.125 **大瀧拓哉**（ピアノ）
2／	6	(火) 12:15	Vol.126 **中 恵菜**（ヴィオラ）

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービスをご利用いただけます［有料・要予約］。
お申し込み・お問い合わせは（株）マザーズ 0120-788-222まで。

2023年8月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます **www.toppanhall.com**

INFORMATION

トッパンホール23周年 バースデーコンサート
―新ウィーン楽派への軌跡―

みなさまが年のはじめを心期するものを持って迎えるように、トッパンホールも新シーズン最初のコンサートは、何かしら思い入れの深いもの、力の入ったものになってしまいがちである。数年に一度はそういう気負いや思い入れとは離れた境地でスタートしたいと計画を進めてみるのだが、そういう時に限って今度は周りからいろんな期待の声が寄せられ、逃れられずに期して臨むコンサートを創ることになったりする。今年は後者のケースにあたるようで、敢えて数年前からハーゲンQにもフォーレQにも、ほかのトッパンの核となってくれている外来アーティストの誰にも声をかけずに準備を進めていたのだが、4月の〈トッパンホール アンサンブル〉以降なんだか風向きが変わってしまい、結局あのコンサートの続編を計画することになった。

そうと決まればアイデアは次々と浮かぶので、浮かんでは捨て浮かんでは捨てして吟味の結果出来上がったのが、〈23周年バースデーコンサート―新ウィーン楽派への軌跡―〉のコンサート。4月25日の〈トッパンホール アンサンブル―弦楽四重奏―〉では、シューベルト最後の弦楽四重奏曲、第15番 ト長調を核にして、弦楽四重奏がそこに至った道筋と、その後に歩んだ拓けくる道を、ベートーヴェンの初期とウェーベルンの2曲に託してプログラミングしたのだが、今回もまた1820年代のシューベルトを核に置いて全体を構成した。選んだのは、天国的な歌謡性とデモーニッシュなまでの劇性を象徴する2つの作品であるピアノ三重奏曲第1番 変ロ長調と弦楽四重奏曲第14番 ニ短調《死と乙女》。この2曲を並置し体感してもらうところを起点として、次なるロマン派と、さらにその先に広がる世紀末ウィーンの爛熟の芸術を音化した作品を共に旅していただければと考えている。

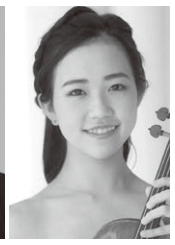
19世紀への惜別の歌のような美しいシェーンベルク《浄められた夜》（1899）が後半のメインとなるが、そのシェーンベルクの音楽にはブラームスやワーグナーの多大な影響が見え隠れする。そこでブラームス晩年のピアノ曲《3つの間奏曲 Op.117》をその前に配した。ブラームスの、そしてロマン派の黄昏の音楽だ。さらにはシェーンベルクが切り拓いた新たな世界の象徴としてベルクの《弦楽四重奏曲 Op.3》を選曲。無調の形態をとりながらも、隠しようもないほどに濃厚なウィーンの色香と歌が籠められたベルクの素性を明らかにする傑作。これもシューベルト最後の弦楽四重奏曲を経ずには開かれなかった扉の一つのように思われる。

出演者については、まず4月の〈トッパンホール アンサンブル〉で圧倒的なシューベルトを聴かせた周防亮介、笹沼樹を核にピアノ三重奏曲はメンバーを構成、ピアノには笹沼と抜群の相性をみせる兼重稔宏を起用した。彼には得意とするブラームス晩年の作品もお願いしている。《死と乙女》とベルクは、5月のリゲティ・プロジェクトで驚愕の演奏を聴かせたクァルテット・インテグラが、本公演のためだけに帰国して演奏会に臨んでくれる。今度はどんな新たな扉を開いてくれるのか、みなさまと共に固唾をのんで見守りたい。メインとなる《浄められた夜》は、ここ数年トッパンホールで印象深い演奏を展開してくれた若手精鋭を集めた。この曲は本来的には様々な相容れない感情やスタイルを持ったものが集った時が一番面白くなりそうな予感がするのだが、今回は多少でもそんな雰囲気が醸し出せたら最高だと思っている。

（西巻正史／プログラミング・ディレクター）

トッパンホール23周年 バースデーコンサート
2023年10月1日（日）16:00 完売
周防亮介（ヴァイオリン）／笹沼 樹（チェロ）／兼重稔宏（ピアノ）
小川恭子（ヴァイオリン）／中 恵菜、田原綾子（ヴィオラ）／佐山裕樹（チェロ）
クァルテット・インテグラ
［三澤響果、菊野凜太郎（ヴァイオリン）／山本一輝（ヴィオラ）／築地杏里（チェロ）］
シューベルト：ピアノ三重奏曲第1番 変ロ長調 D898 A
シューベルト：弦楽四重奏曲第14番 ニ短調 D810《死と乙女》B
ベルク：弦楽四重奏曲 Op.3 B
ブラームス：3つの間奏曲 Op.117 C
シューンベルク：浄められた夜 Op.4 D
A 周防、笹沼、兼重　B クァルテット・インテグラ　C 兼重
D 周防、小川、中、田原、笹沼、佐山

ふたつの才能が融合して生まれる美しき世界



お昼のひとときにフレッシュな若手アーティストの真剣勝負をお届けしている〈ランチタイムコンサート〉。10月は、スケールの大きな音楽を描く北村明日人（ピアノ）と、優れた音楽的資質と抜群のテクニックを兼ね備えた落合真子（ヴァイオリン）が登場します。北村は、第46回ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリをはじめ、国内外のコンクールで受賞多数の実力者。世界での活躍が期待される注目の若手演奏家として「題名のない音楽会」にも出演した、期待の大器です。一方の落合もまた、コンクール受賞多数のほか、国内の音楽祭に出演する人気ヴァイオリニスト。このふたりが織り成す、ブラームスとシューマンの深い次元での対話に、どうぞご期待ください。

〈ランチタイムコンサート Vol.124〉
北村明日人（ピアノ）＆**落合真子**（ヴァイオリン）
ドイツ・ロマン派の響き ～ベートーヴェンからの解放～
2023年10月11日（水）12:15
シューマン：ヴァイオリン・ソナタ第1番 イ短調 Op.105
ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調 Op.78《雨の歌》
入場無料（要予約／お一人様2席まで）
受付期間：2023/8/30（水）～9/20（水）
お申し込み方法：
［一般］ハガキ（抽選制・当選者のみ通知）
〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3
トッパンホールチケットセンター「ランチタイムコンサート Vol.124」受付係
（住所、氏名（フリガナ）、電話番号、希望席数を明記ください。）
［会員］電話

第92回 日本音楽コンクール予選

チェロ部門	第1予選	8月28日（月）～29日（火）
	第2予選	8月31日（木）
バイオリン部門	第1予選	9月2日（土）～4日（月）
	第2予選	9月5日（火）～6日（水）
	第3予選	9月7日（木）
ピアノ部門	第1予選	9月9日（土）～13日（水）
	第2予選	9月15日（金）～17日（日）
	第3予選	9月19日（火）
声楽部門（オペラ・アリア）	第1予選	9月20日（水）～21日（木）
	第2予選	9月25日（月）
ホルン部門	第1予選	9月23日（土・祝）
	第2予選	9月26日（火）

※シャトルバスの運行はありません。
全席自由：2,500円／回数券（4枚）8,000円
※ピアノ・バイオリン第3予選を除く
【ピアノ・バイオリン第3予選】全席指定：3,500円
主催：毎日新聞社　NHK　　会場協力：トッパンホール
特別協賛：三井物産株式会社
協賛：岩谷産業株式会社／株式会社INPEX
お問い合わせ：日本音楽コンクール事務局
03-3212-0187（平日10:00～18:00）

チケットのお申し込み：トッパンホールチケットセンター

表紙：トッパンホール アンサンブル
さまざまな編成で室内楽の醍醐味に触れてきた〈トッパンホール アンサンブル〉が、この4月、初めて挑んだ“弦楽四重奏”。音楽界に一石を投じたこの企画は当初から大きな関心と注目を集め、数十時間もの準備で臨んだ本番は、アーティストとホールがともに特別な情熱で深めた世界が息をのむ集中のもと昇華され、得も言われぬ達成感に満ちた、刺激的一夜となりました。

編集後記
本格的な夏に入る前から記録的な暑さに見舞われ、「猛暑」「酷暑」どころではない「地球沸騰化」なるパワーワードも飛び出した今年。暑さをこらえつつ、夏のイベントを楽しまれた方も多いと思います。そして、残暑の候に始まるのが、日本で最も長い伝統と高い水準を誇る日本音楽コンクール。今年も8/28からトッパンホールで予選がスタートしました。近年はNHKで、コンクール出場者の素顔が垣間見える密着ドキュメンタリーが恒例になったりと、その存在が身近に感じられるようになった“音コン”。今回もさまざまなドラマが生まれそうです。（雪）

発行日：2023年9月1日　発行・編集：株式会社トッパンホール 広報部　〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3　(03)5840-2200　https://www.toppanhall.com/　制作：株式会社トッパングラフィックコミュニケーションズ　印刷：凸版印刷株式会社
©TOPPAN HALL 2023.9 KI
※当紙に掲載している内容について、許可なく複製あるいは転用することを固く禁じます。